

3．スポーツインターナショナルとコミンテルン

—モスクワ・アルヒーフ調査に基づいて—（その3）

上野 卓郎

本報告の課題は、以下の二点である。第一に、このテーマでの報告の当面の締めくくりとして、コミンテルンによるRSI解散秘密決議のプロセス（1937年3-5月）をアルヒーフ関連文書の比較検討によって明らかにすること。第二に、同時に、いわゆる37年コミンテルン・スポーツ決議についてのアルヒーフ独語原文と『コミンテルン資料集』所収露語訳文との異同の検討と、上記1と関連したこの決議の読み方を示すこと。

RSI解散秘密決議のプロセス

1 プロセスを解明するアルヒーフ関連文書

- 37年1月9日付アクサミット文書(コミンテルン宛) - Vgl. (その2)
- 2月23日(文書管理スタンプ日付)アクサミット「アントワープ労働者オリンピックアード」[雑誌草稿?]
- 3月22日コミンテルン執行委員会幹部会会議「速記録」- キーズ論文から
- 3月28日コミンテルン執行委員会幹部会スポーツ問題委員会文書
 - 3月23日付スポルチンテルン書記局「36年の活動情報」
 - 3月23日下書き、25日清書の同上「フランスその他のスポーツ運動の状態についての短い情報」
 - 3月25日付コミンテルン書記局「スポルチンテルンの主要任務に関する決議案」(秘密)
 - 3月28日 同委員会構成文書—Vgl. (その1)
- 4月4日[作成主体不明]「草案 スポルチンテルンの活動に関する決議」
- 5月7日コミンテルン執行委員会幹部会「RS

I解散決議」確認、同日付で「スポーツ運動における共産諸党の任務に関する決議」(いわゆる37年コミンテルン・スポーツ決議)「RSI解散決議」3月14日独文、25日仏・英文、4月11日仏文、5月22日独文=最終本文—Vgl. (その1)

2 「コミンテルン執行委員会幹部会会議速記録、1937年3月22日」- キーズ論文から再構成

召集目的：ディミトロフのイニシアティブで、スポルチンテルンに関して何がなされるべきかを論議するため。

クーシネン：開会発言。「私が思い出せるかぎりでは我々が幹部会の議題にスポーツ運動を取り上げるのはこれが最初である。疑いなく我々はこの問題を過小評価してきた」—コミンテルンの業務の中でスポーツに与えられた優先権の低さを暗示したものだが、その後の発言者[不明]が、スポーツ問題はこれほど「広い基盤」の上ではないがすでに近年提出されていると指摘して、クーシネン発言を修正した。一つのテーマ提起、これがこの会議を通して後続の発言者によって繰り返されることになる。つまり、スポルチンテルンとその加盟組織は、非労働者グループに加わる大多数が労働者であるのが事実なのに、そうしたグループとの接触を妨げる狭い「セクト主義」による障害を負っている。これがスポルチンテルンの失敗の中心的理由だ。スポルチンテルンは非労働者組織に属する労働者大衆から自らを切り離してしまった。

アクサミット：スポルチンテルンの活動を弁護しつつ不十分な点を認めた。主として兵役前身体訓練の強化を目的とするスポーツと体育の中央

集権化と国家統制の趨勢に言及して、共産主義者はそうした展開に単純に反対できないと断言。もし共産党がそうした広範なポピュラーなプログラムを支持する道を見出さなければ、スポーツを愛好する膨大な大衆から自らを切り離すことになると警告。労働者スポーツ組織の「政党政治的性格」が自らを大衆から孤立させてきたし、非労働者クラブとの架け橋の構築を困難にした「セクト主義的態度」を強めてきたのは残念だ。「この古い組織形態では決してスポーツにおける進歩的勢力と共に前進することはないだろう。全般的な大組織から孤立した独立の労働者スポーツ組織の形態は我々にとってもはや満足できるものではない。新しい形態、各国の全般的スポーツ運動の中で我々の影響を組織する新しい形態を見出さなければならない」。共産主義のクラブを完全に解散して主流の組織に加わるという提案を急に止めて、共産主義のクラブは主流の組織における民主主義的、進歩的傾向を強化するために主流の組織ともっと密接に活動すべきだと主張。

チェモダーノフ：ディミトロフ同志は、スポルチンテルンが「国際オリンピックの運営の基盤に平和のための人民の友好がある」ことを十分に認めてこなかったと叱責した。

アクサミット：フランスやノルウェーのような国々ではNOCがファシストや反動家ばかりでなく進歩的分子によっても構成されていることに注意し、労働者スポーツ組織はこれらの委員とともにNOCを「民主化する」ために活動すべきだと主張。

ハルチェンコ：スポルチンテルンは殆どどこでも影響力を失った。その大きな理由はスポルチンテルンが純粋に政治的なアジテーションを好んでスポーツを全く無視したからだ。労働者スポーツが相対的に強固なフランスやノルウェーではスポルチンテルンは殆どあるいは全く影響力を持っていない。チェコスロヴァキアを除いて他の国々ではスポルチンテルンの役割は取るに足らないものだ。これは中央の組織的センターを持たず、3人の書記（モスクワのイワン・ジョルダク、プラハのカルロ・アクサミット、フランスのヴィリ）によって運営されている。しかも彼らは何の調整もせずに働いている。近年その活動は果てしない無駄な議論と行動の無計画に、今や多くの人々がその存在理由に疑問を抱く状況に陥った。

コミンテルンが関わるスポーツ政策のための新しいプログラムを立案することを委任された委員会の任命をもって閉会。—[「スポーツ問題委員会」のこと]

3 「スポルチンテルンの主要任務に関するコミンテルン書記局の決議案」(37年3月25日付)と「草案 スポルチンテルンの活動に関する決議」(4月4日頃)の比較

コミンテルン書記局決議案	草 案
[前文] 労働者スポーツ運動はまだ大衆運動でない。RSIと特にSASIは「党派」組織で、大衆スポーツ組織に対するセクト的態度未克服。共産党、青年同盟、RSI指導部に以下のことに注意を向ける。 1 労働者スポーツ組織の国際的統合に関して。 主要ブレーキはSASI。	1 36年にRSIに提起された課題に幾つかの積極的成果。 同時に統一でのRSIの不十分なイニシア

その達成での重大な障害はR S I書記局の不十分なイニシアティブとセクト主義的誤り。

「R S I書記局は抽象的にS A S IとR S Iの統合の課題に取り組んで、各国におけるスポーツ連盟の統合から正しい政治的実践的帰結を引き出す術を心得ていなかった。統合したスポーツ連盟を支えとして国際的統一のための具体的な闘争を展開する代わりに、R S I書記局はR S Iの「展望」と「解散」に関する役に立たない議論に従事している。」

「R S I書記局は、1937年に行われるアントワープ・オリンピックに対して誤った立場を取った。全ての労働者スポーツ連盟をアントワープ労働者オリンピックへの参加に方向付けて根気よい作業によって国際的接近と統一を得ようと努力する代わりに、まず第一にどんな事情があろうともオリンピックへのチェコスロヴァキア・スポーツ連盟（F P T）の許可を得ようと努力し始め、それによってS A S Iへの接近における不必要な困難を作り出した。」

「E K K I書記局は、個々の連盟（特にF P T）がオリンピックへの参加を許されるか否かに関わりなく全ての労働者スポーツ連盟が準備を強化し積極的にオリンピックに参加すべきだという意見である。」

連絡委員会の利用。

「各国における国際的統一のための闘争の経過に応じて、R S I書記局は統一的スポーツインターナショナルの形成に関する問題をS A S I指導部の前により具体的な形で提起すべきだ。」

2. 進歩的スポーツ運動の発展に関して。

進歩的綱領を基礎にした全スポーツ勢力の協同と統合。形態同じでない。協同での共通の契機は人民の健康、スポーツの進歩的発展、自治、諸民族友好強化、人種中傷反対、平和

ティヴとセクト主義的誤り。「統合労働者スポーツ連盟を頼りにして国際的統一のための具体的な闘争を展開する代わりに、R S I書記局は抽象的にR S IとS A S Iとの統合の課題の解決に取り組み、各国のスポーツ連盟の統合から正しい政治的実践的帰結を引き出す術を心得ていなかった。」

「全ての労働者スポーツ連盟をアントワープでのS A S Iの労働者オリンピックへの参加に方向付ける代わりに、R S I書記局は何よりもチェコスロヴァキアR S Iセクション（F P T）のオリンピックへの許可をどんな事情があろうとも得ようと努力し始めたのである。」

2 「スポルチンテルンの今後の活動のための方針としてスポーツ運動における共産党の活動に関するコミンテルン執行委員会の決議が役立つ。スポルチンテルンは各国での活動に重点を置くべき。」

「S A S Iを指導するチェコスロヴァキア改良主義者による統一のサボタージュを克服するしかない。」

「スポルチンテルンは全ての労働者スポーツ連盟に勧めて、個々の連盟（F P T）が参加を許されるか否かに関わりなく準備を強化し積極的にオリンピックに参加するようにすべきだ。」

連絡委員会の利用。

「各国での国際的統一の闘争経過に応じてスポルチンテルン書記局は統一スポーツインターの創造の問題をS A S I指導部の前に具体的な形で提起すべきだ。」

スポーツマンによるスペイン人民の闘争支持のためのイニシアティブの展開。

10月革命20周年と結合したソ連のスポーツ運動の成功普及と資本主義国のスポーツマンの交流促進。特別な協同機関による大衆組

強化の共同の活動。以下書記局の勧告。

a) 全労働者スポーツ連盟の他の大衆スポーツ組織との大衆スポーツ祭典と競技会の共同実施への思い切った路線。b)ブルジョア民主主義国での既存大衆スポーツ組織とその内部の進歩勢力の支持、発展。c)スポーツ問題国家機関がある国で委員会加入、大衆スポーツ組織代表との結合強化。d)スポーツ界に現存する強いオリンピック伝統の諸民族友好と平和への、排外主義と民族主義反対の闘争強化への利用。国内オリンピック委員会の民主的進歩的人士による強化。e)大衆スポーツ組織でのファシズム軍国主義分子の影響反対闘争による軍事・身体教育の組織、フェライン、学校での活動と労働者スポーツ連盟の軍事・身体教育組織化の権利とインストラクター養成の権利獲得。f)国家・自治体当局からの大衆スポーツ運動の物質的支持の獲得。

合法的共産党の中央委員会への勧告。フランス、チェコ、ノルウェー、ベルギー、スウェーデン、イギリス、アメリカ。

R S Iの路線—(その2)で引用した。

組織におけるスポーツマン把握での反ヒトラー・オリンピアド闘争の経験(パリのフェアプレイ委員会、プラハの人民スポーツ委員会)の発展拡大。

3. 課題のよりよい実行のために。

a)大衆スポーツ活動経験ある同志の参入(フランス、イギリス、スカンジナビアから)による書記局強化と国際的協議による各国スポーツ活動経験の評価。

b)『国際スポーツ評論』の改造。

c)フェアプレイ委員会の結びつきを利用して大衆組織のスポーツマンのための情報発行。同時に国際的なスポーツマンの広範な圏へのスポーツ雑誌発行。書記局は3ヵ月後に具体的提言すべき。

d)国際的なスポーツ協議会の近々の実施。最重要な国の共産党と青年同盟のスポーツ活動責任者の参加を。

両者に共通する指摘—1) R S I 書記局のセクト主義批判、イニシアティヴ不十分抽象的取り組み。2) アントワープ労働者オリンピアドへの方針の誤り。3) 連絡委員会の利用。4) R S I 書記局の強化、雑誌改革、新たな情報、雑誌発行、国際協議会開催。

異なるところ—1) 前者が R S I を「党派組織」としたのに対して後者はそう規定していないこと。2) R S I の 36 年の活動成果を前者は消極的に、後者は一定積極的に評価したこと。3) スポーツ運動における共産諸党の活動に関するコミンテルン執行委員会の決議、スペイン支援、ソ連スポーツとの関係、反ヒトラー・オリンピアド闘争経験の発展を後者だけが挙げていること、4) 前者が進歩的スポーツ運動の発展のためとして「勧告」

したのに対して後者はそうした形では提起していないこと。

「スポーツ運動における共産諸党の任務に関する決議。機密」(1937年5月7日、コミンテルン執行委員会幹部会)—アルヒーフ資料(ドイツ語原文)訳—とロシア語訳

ここでは二つの全文対比の掲載は行わず、決議の(一)から(四)の相違点を示すことにする。

(一)最後の段落に、かなり文章上のニュアンスの違い。

(二)特に重要な相違が見られるのは、b)の次の部分。ロシア語訳は「またそれらの組織をあれこれの形態で広範な、進歩的な、無党派のスポーツ

運動（たとえば、チェコスロヴァキアの人民スポーツ運動である「フェアプレー」運動のような）に参加させなければならない。」だが、ドイツ語では「広範な、進歩的な、無党派のスポーツ運動（たとえば、フェアプレー運動、チェコスロヴァキアの人民スポーツ運動などのような）」となる。事実として例示の二つの運動は別の運動であるから、ドイツ語のほうが正確。

（三）a)の最後の段落—ロシア語訳「労働者のスポーツ事業から企業の管理者や代表者を排除することに」がドイツ語では「労働者のスポーツ活動から企業によって任命される管理者や企業指導部の代表者が遠ざけられることに」となる。d)では、ロシア語訳「体育の軍事化」はドイツ語では「軍事的・身体的教育」。

（四）ロシア語訳「党の新聞・雑誌においては、扇動・宣伝をおこなうとともに」はドイツ語では「党の新聞雑誌、扇動、宣伝において」。

キーズのこの決議の読み方—「スボルチンテルンの解散の直前に、コミンテルンは、『スポーツ運動における共産諸党の任務』に関する決議によって新しい方針を知らせた。」「コミンテルンは、スポーツに関心を持つ労働者の『ほんの一小部分』のみを含むスボルチンテルンの手にスポーツを委ねる代わりに、共産主義的か『ブルジョア的』であるかに関わらず全ての進歩的なグループとの幅広い連携を鍛えるべきであると共産諸党に主張した。可能なところでは共産主義者は全国スポーツ連盟に加入し、国内オリンピック委員会内の『民主的、進歩的』勢力を強化するよう指図された。」

キーズが読み落としたもの—決議の最後の段落、アントワープ労働者オリンピックアドとの関連。全体としてもスポーツインターとコミンテルンの37年初頭のやりとりの彼女の再構成においてアントワープ問題は問題になっていない。キーズの視点がコミンテルンあるいはソ連のスポーツ政策におかれているからであろう。

スボルチンテルン解散の意味づけをキーズは

「オリンピックへの共産主義オルタナティブ」と題する第5章の「まとめ」で次のように与えた。

「その16年間の存在を通じて重要な成功を殆ど主張せず、解散の時には崩壊に瀕していた。その失敗の理由は、その解散によって申し立てられた批判から判断して、主として政治のためにスポーツを疎かにしたことにあった。スボルチンテルン役員は、資本主義文化に対する人の胸を打つオルタナティブを労働者に供給する活気に満ちた文化的組織を創造するために働く代わりに、些細な下らない口論、社会主義者への攻撃、不器用な政治的教化に焦点を置いた。スボルチンテルン役員は、政治的満足を実にスポーツに吹き込むよりもむしろスポーツの死で政治に捧げたのである。」「共産諸党からもコミンテルンや共産主義青年インターナショナルからも具体的な援助がなかったことが、ヨーロッパでそれ自身の役員を非常に僅かしか配備することができなかったスボルチンテルンにとって重大なハンディキャップであった。スボルチンテルンは小さく、資金も乏しく、主流から追いやられたマージナルな組織であった。それが役に立たなかったことも全く驚きではない。しかしながら、スボルチンテルンの根本の失敗の主たる原因は、それ自身の固有の弱さよりも、ソビエト体制が1933年初頭に『ブルジョア』スポーツへの統合に移り始め、独立した国際スポーツ組織を不必要にした、という単純な事実に戻せられることができる。」

この最後の部分が吟味されるべき論点である。果たしてソビエト体制の「ブルジョア」スポーツへの統合移行開始、独立した国際スポーツ組織不要化という単純な事実でRSI解散を説明したことになるのだろうか。キーズのこの最後の部分の前の記述は、RSI像を描くのに重要な輪郭を与えたと言ってもいい。だが、コミンテルンによるRSI解散と37年スポーツ決議のプロセスはキーズの説明では片付かないことを、これまでのアルヒーフ資料の検討で示してきた。その総括によってキーズとは違う説明をすることになる

はずだが、その論証は本報告後に改めて行うつもりである。

一応の完結にあたって

モスクワ・アルヒーフに基づくスポーツインターナショナルの研究が 2002 年刊行のグノ著作と 2001 年のキーズ博士論文(未公刊)によって提示され、この研究は一気にアカデミックな水準に上がったと言える。2003 年の筆者のアルヒーフ調査はこの二人の跡を追うだけでなく、彼らが見なかった資料を発掘するものだった。R S I 史のモノグラフとしてはグノ著作が挙げられるべきだが、30 年代の R S I とコミンテルンについてはキーズ論文のほうが資料的価値のあるアルヒーフ資料を含んでいた。筆者は、これまでの報告に基づいて確認できた論点の批判的論証に取り組むつもりである。

そのさい提起されられると思われる問題について、一言しておきたい。それは、特に本報告で検討した決議、案などで国際労働者スポーツ運動の共産主義組織を論じることの限界である。このことは十分自覚している。とはいえ、資料が発掘されたかぎり、その資料のテキストクリティークは言うまでもなく、その決議などの背後にあるものを解明することは当然である。その意味では、コミンテルンが 35 年第 7 回大会で路線だけでなく、組織的にも転換したこと、36 - 37 年にはスターリンの影響とソビエト外交の道具化を強めたことをこれまでの報告では自明のこととしてきたことを反省している。このことも近年のコミンテルン研究の成果に基づいてスポーツインターナショナルの歴史研究に組み入れることが可能だし、不可欠であろう。